

滋賀の出版文化情報誌

デュエット

Duet

2011 秋 | vol.104

新撰 淡海木間撰 48

コウモリのおっばい

INFORMATION STATION

催し案内 2011年秋

MYBOOK

自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS

サンライズ出版の新刊案内

インタビュー

野村善一さん

ノムラ文具店の120年





▲ノムラ文具店〔彦根市銀座町、2011年6月撮影〕



▲昭和5年の野村商店（後のノムラ文具店）初荷のようす〔表紙の写真と同日〕

インタビュー ノムラ文具店の120年

明治26年(1893)創業以来、彦根市銀座町の現在地で営業を続けてきたノムラ文具店が、今年6月30日をもって閉店しました。「文具の野村」として知られ、彦根周辺はもとより、卸商として県内文房具店の多くとつながりのあった同店。3代目となる野村善一さん(82歳)にその歴史をお聞きました。

ヤマノ商事株式会社代表取締役 **野村善一さん** ▶

▼彦根銀座街。昭和30～40年代には、湖東第一の商店街として活況を呈したが…



▽野村さんご自身は十分時代の変化に乗ってこられたと思いますよ。やはり流通のシステム自体の変化が大きいのでは。

野村 ええ、それもあると思いますけどね。
▽明治以降の小売業や卸商の変化をすべて見てこれたお店ではないでしょうか。

野村 いやいや。そやけど、6月の30日店は本当にたくさんの方から惜しまれて閉めましたんでね。いうなれば、商売人冥利に尽きると思います。私の生き葬式を見させてもらうた。そう思ってます。

▽今日も「ノムラさんに行く」と言うとき、懐かしがる社員が数人いました。高校生の頃に漫画を描いていた者は、枠線を引く力^{ぐち}を[※]買いに行ったとか。

野村 カラス口、まだ残っていますわ。閉店したのは自慢するものなんですけど、店の品ぞろえは滋賀県一です。面積からいう

▲ノムラ文具店の店内。
店内には、店の歴史を
示す明治時代の引き札
などを展示

◀自慢の品揃え。写真は
ポスターカラーのコー
ナー（6月撮影）

でも1、2位を争うぐらいのはずです。45坪ほどあるんでね。あのビルを建てたのが昭和47年（1972）。オイルショックの直前で、オイルショックの後あたりが、私どもとしては一番最盛期ですね。やる以上は文具屋のモデルでありたいと私は誇りを持っていましたんで。

だけど、銀座通り自体がすたれて、お客さまがお通りにならない。30〜40年昔と同じ姿の店を、今まで維持していた方がだいたい間違いないですね。鉛筆一つとっても、三菱鉛筆以外に、ステッドラーの鉛筆を置くとか、硬度は10Bから10Hまでそろえて、▽10Hがあるのも知らなかったです。

野村 三菱鉛筆の出しとる硬度は全部そろえて、バラで販売していました。実際のところは、4日以上の鉛筆は売れやしない。まだBは売れるんですよ。お年寄りが書きはるのにね。色鉛筆でも、水で溶ける色鉛筆の水彩色鉛筆から、紙巻き色鉛筆から硬軟、全色バラとセットをそれぞれ売っている。よそのお店行ったら、ライバルのくせに、「彦根のノムムに行ったらあります」とお客さんに教えておられた。

油絵の絵の具、この頃はアクリル絵の具※2
 顔彩がんさいもそろえた。※3その上、今度は紙。何十
 色という紙が、全判紙で残っています。切つ
 たやつも。

▽少量多品種にする必要があるわけですね。

野村 さつきのカラス口がそうです。もう

まんねん。今の時代にどう応じていくか、店主が判断できないかなんだ。まあ、大きなところは皆POSレジで打って、その商品の傾向をつかんで商品の利益と回転率とで足切りをしていく。回転率の悪い商品は置

※1 カラス口 製図用具の一つ。2枚のくちばし状の部分の間に墨汁をふくませて線を引く。

※2 アクリル絵の具 アクリル樹脂の乳化液を練り合わせ材として用いた絵の具。速乾性で、乾くと耐水性にすぐれる。

※3 顔彩 日本画材料の一つ。顔料に、デンプン質と膠分にかわを加えて練り、角皿に入れて乾燥させたもの。

※4 全判 規格寸法（A判、B判、四六判、菊判）
の原紙で断裁されていないもの。

※5 CAD computer-aided design の略。コンピュータを使って行う機械や構造物の設計・製図。また、その機能を組み込んだコンピュータシステムやソフトウェアを指す。

※6 POS 販売時点情報管理（英語：Point of sale system）の略称。レジで商品を識別するJANコードを読み取って、単品単位で売上げ実績を集計する方法。

かない。逆に、回転率の悪い商品だけ置いていたのは、私らみたいな文具屋の専門店。製図用品でも、たまたま来たお客さんが、「うわっ、これは珍しい。一つもろうとこるか」といって喜んでくれることがよくあるけど、それでは店ほめたない。

もうこの頃は、新学期の需要があらへん
 のや。それでも一応、新学期終わって、6
 月の末で閉めようとして決断した。5月半ばに、
 5月20日から6月末まで閉店大売り出しと
 いう新聞折り込み入れて。お客さんは、ノ
 ムラがのうなったら買うとこないのがわ
 かったるもんやさかいに、ウワツと来てく
 れはったんやけど、40日間やつても売れ
 んものは売れへんねん。洋服とかなら、柄
 は多少どうでも、値段で辛抱して買わはる
 けど、文具屋は、黒のものを買いに来てん
 のに、赤でどうですかとはいかへん。

野村　そやから、値段をマケてもあかんねん。でも、専門的な人やったらほしくてかなわんものもある。こないだも、午前中に、

楕円^{だえん}のテンプレートを買いに来たお客さんがいて、2枚買ってくれはった。今日はお半値ですわいうて。テンプレートでも、非常に特殊なものをいっぱいそろえとるわけや。ボルトやナットの形やか、人体テンプレートまである。人の体を書くやつ。といって、特殊なお客さん相手にしても商売にならん。油絵の具にしたって、うちでみんなそろえてくれるかというたら、絵

当初は紙屋として出発

▽時代をさかのぼって、創業当時や野村さんが子供だった昭和初期のお話をお聞かせいただけますか。

野村 明治26年の創業でして、その時の大福帳がうちに残っています。今から120年ほど前、めでたく開店いたしました。

▽この写真(表紙)はいつ頃になるんですか。

野村 それは昭和5年(1930)。この真ん中の赤ん坊が私やから。昭和4年1月9日の生まれですから。写真はちょうど1年のちの、昭和5年1月の初荷です。

▽現在のどの位置にあつたんですか。

野村 今と同じところ。もつと間口が広がって、ビル建てる時に30坪売りました。左隣の花屋さんと洋服店さんも、もとはうちの土地です。

▽店頭には、「王子製紙株式会社和紙部滋賀県代理店」と書かれています。「ノート帳簿製造」ともありますね。

野村 ええ、ノートなどを製造していたんです。「さざ波印」と書いているでしょう。

▽ああ、あります。「さざ波筆発売元」。

野村 さざ波いうのは、「さざなみの」が近江や大津にかかる枕詞で、まあ琵琶湖のことです。

▽メーカーだったんですか。

野村 「さざ波インキ」、「さざ波万年筆」

画教室とかにも京都の業者が全部入っちゃう。先生にリベートを払ってね。だからうちへ来てくれるお客さんは、この色がないさかいて1色だけ買うお客さんや。

▽そこへまた、アスクルやカウネットなどの通販が入ってきて。

野村 それに百円ショップがあるでしょう。それで、学童数は減るでしょう。

▽まさに今の日本の商業界の縮図ですね。

とかいう名前の商品を作って売っていたんです。今みたいに、ブランドの強い時代やないんでね。

もともと生活に関わる紙というのは、正月用に年末に貼り替える障子紙、お菓子を包んだりする半紙とか色紙、そういうものです。今みたいな洋紙というのはほとんど需要がない。みんな和紙です。その和紙の仕入れはどこですかというたら、美濃紙。それから因州^{いんしゅう}和紙。これは鳥取。それから、四国の伊予^{いよ}(愛媛県)・川之江^{かわのえ}。この辺なら、やっぱり美濃紙。

みんな当時は手漉きです。水が冷たくなかったらあかんねん。生ぬるい水で漉いたら、ボテ紙しかできない。そやから、一番いい紙は寒漉き^{かんずき}のもの。上にボンツと品質保証のハンコを押してね。紙屋は、美濃にある漉き屋まで行って、漉いているところを見て、実際に取って買ってくるんです。

▽いつ頃の話ですか。

野村 戦前。買って来た紙は後から来る。それを入れる倉庫がある。この倉庫を彦根駅の真正面から左側、丸通(日本通運)の裏に大きな土蔵の倉庫が連棟^{れんちゆう}で並んでいた。その一つを借りて、届いた和紙と洋紙を入れて。障子紙は、漉いたままの一枚漉きの大きさで来るから、それを裁断して、継

※7 テンプレート 四角形や円などがくりぬいてある定規板。内側の縁にそって図形を描く。

※8 結果 商家で帳場の囲いとして立てる格子。帳場格子。

※9 カロム 円筒形の玉を指ではじき、正方形の盤面に並べた玉を四隅のコーナーの穴に入れていくボードゲーム。明治末期から大正初期に海外から彦根に伝わり、定着したとされる。

いで、巻いて、障子紙をつくらななりません。▽それをお店でやっておられた。

野村 うちでやっていたんです。銀座町にもう一つある文房具屋の正木屋さんも元は紙屋です。戦前はね、障子紙とか、紙の需要は多かった。だから、正木屋さんとは手を組んだりライバルになったりしています。あつちは製造はしない小売屋さんでしたが。▽写真を見ると、体格のよい男性従業員さんが並んでおられます。

丁稚や番頭さんは、柏原(米原市)から来ていただくことが多かった。男は全部住み込み。丁稚さんだけでも4人か5人。中堅になって結婚したりすると、通いになる。それと、昔は女中さんが2人はいましたね。2人いないと賄い^{まかえ}できひん。当時の店内というのは畳敷きで、帳場には結果置^{けいりざき}いて、後ろに金庫があつてね。

▽昔は大みそかに集金という、一年のサイクルだったとすると、途中はお休みも結構あつたんですか。

野村 いや、休みはない。盆と正月しかない。店自体はずっと開店してた。12月はどこん仕事をして徹夜続きなぐらい。ほいで、元日の朝は好きなだけ寝る。その晩が今度はみんなでかるたを取ったり、カロム^{カロム}をしたりね。ほんとに正月は、みんなが喜んで喜んで、徹夜して遊んで。

ところが、もう2日には初売りやつたんだ。朝5時頃から、お客さんがバンバン



▲昭和10年頃の彦根繁華街(『新修彦根市史 景観編』掲載の復元マップに野村善一さんの記憶による修正を加えて作成)

- ※10 仙台初売り 宮城県仙台市など旧仙台藩領内で、1月2日から3日間、豪華な景品をつけて盛大に行われる初売り。江戸時代からの伝統行事。
- ※11 えびす講 陰暦10月20日に商売繁盛を祈願してえびすを祭る行事。彦根の場合、橋向町にある蛭子神社の祭礼で、毎年11月23日前後の3〜5日間、商店街の大売り出しが行われる。
- ※12 官立彦根高等商業学校 全国9番目の官立高等商業学校として、大正12年(1923)4月に開校。昭和24年(1949)、戦後の学制改革で滋賀大学経済学部となる。

戸をたたかれる。うちの店の間口が9間(約16・4m)ある。そこにレールが3本、向こうまで敷いてある。1本は通しで、2本は柱があるところで切れていて、冬はガラス戸がはまる。一番表の1本は板戸をガツとやると、ビヤツと走っていくから、夜の閉店の時は皆でバツと閉めるわけですわ。

初売りの日は、もう朝の暗いうちから閉めてある戸をたたきやりまんねや。朝一のお客さんは皆、粗品のいい物がもらえるもんだから、それを目当てにね。それぞれの店の開店を待ちわびて、町のあちこちを暗いうちから歩かあるから、正月早々にぎわうんですよ。

▽今も「仙台初売り」というのがありますね。あれも2日からです。

野村 おもしろいのは、初売りで店に一番入るのは女性でないとかかんねん。駿か

マルビシ百貨店のこと

▽昭和8年には銀座町に県内初の百貨店「マルビシ百貨店」が開店するわけですが、お父様が関わっておられたわけですね。

野村 2代目の親父、善七を含む商店主ら10人が出資して、高島屋(履物商)の宮本寿太郎さんが社長の彦根中央土地という会社をつくって、それがマルビシ百貨店の創業です。子供だった僕は、「ちよっとマルビシ行ってきた」「これ持って行ってきた」とか使い走りをさせられてた。

▽戦前のマルビシ百貨店が遊び場みたいなものだったということですが、何が記憶に残っていますか。

野村 私をかわいがってくれた女店員さん。マルビシはべっぴんさんばかり。百貨店の真ん中に中央階段がある。その中央階段の下が電話交換室だった。電話交換手というのは暇なんや。電話がかかってくる

つぎです。縁起がいい。一番に男は入れない。一番左手の端に、たばこ販売のウインドーが出っ張って、戸が閉まっていな。そこから何番目に女性がいるということがわかるわけ。「おお、何番目」と伝えてね。その女のお客さんのいはるとこの戸だけをダツと開けてサツと入れる。

それから一年をまわると、買ってきた美濃紙を加工して、夏にそれを店で売る。8月頃からは小売屋さんへ売る。で、一番よく売れるのが11月の「えびす講」。彦根だけでなく能登川^{のとがわ}とか各地でえびす講があつて、冬の準備として障子紙が皆売れます。うちは、小売り屋さんの売上を大みそかに集金してくる。年いっぺんの回転です。それから、昔の卸屋というのは、一つの市場を自分でつくる力も持っていたし、同時に、金融的な力もあった。

シ百貨店のこと

でしょう。ボタンをポンとこう押すやろうで、何番で出る。「文具お願いします」と言われると、「はい」と押して、下にあるコードを引っ張って、文具部に指して。ほいで、キュツとやって、ガイガイガイと回すと、向こうがチリチリチリと鳴って、つながるとランプがともって、「はい、どうぞ」。ほんな仕事やで、お菓子くれたりかわいがってくれるから、用がなくても一人で遊びに行ったり。

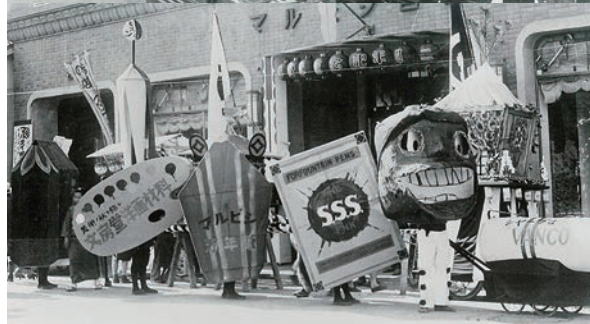
▽百貨店に、戦前の彦根のような地方都市でも平日お客さんはいるんですか。

野村 そら、あるわな。今の銀座と一緒にしたらあかん。うちの場合は、官立彦根高等商業学校(現、滋賀大学経済学部)の学生さんが大事なお客さんですわ。彦根高商への納品も、売店も皆、私とこが卸しました。彦根高商について言うておくと、官



▶昭和8年(1933)に開店したマルビシ百貨店。昭和初期、三越が彦根で出張の大売り出しを行ったこと、彦根の代表店として誕生した。彦根の代表的商店20店舗が1区画ずつを賃借して自店商品を販売するもので、百貨店法による百貨店ではなかった

(上) マルビシ百貨店全景。鉄筋コンクリート4階建て
(中) ノムラ文具店が出店したマルビシ百貨店の文具売り場
(下) 開店2周年記念パレードのようす



いう意識だったと聞いています。かなり裕福な家の人が多かったそうです。

野村 そうそう。それはある。

▽遊郭のあった袋町から学校に通って、卒業の時、お母さんが3年分の付けを払って帰るとか。そういう学生がお金を落とした。

立やから向こうから来たんかと思ってる人が多いけど、彦根の財界人が引っ張ってきたんですよ。

▽大津・八幡・彦根が手をあけて、地元の寄付金が決め手になったとか。

野村 最初は近江八幡にできかけたんや。明治にできた八幡商業学校※13があったから、その上の高等商業学校も八幡につくるべきやというて。これはいかんと彦根の財界人が、敷地も買収して用意して、うちのような店も含めて、皆で寄付をした(寄付者総数234名、寄付総額44万9075円)。そういう苦労があつてできたんです。

▽当時の高商の学生は、今でいえば東大の経済学部へ行っているぐらいのエリートと

いただいた。

▽写真には、「年賀ハガキ名刺印刷承り」「美術謄写及活版」と見えます。

野村 うちは別に活版工場も下請けで持っていました。ノートを印刷したりするため。マルビシ万年筆いうて、百貨店の名前でも万年筆をつくっていたんや。もう1枚

▽ところが、時代は戦争に突入していきま

す。出征する店員の記念写真があります。

の写真は、2周年記念の売り出しのときのパレード。ははっ、あの頃の銀座街のにぎわいというのは、今の人には想像できひん。▽仮装行列が町中へ繰り出すんですよ。昔は滋賀大の運動会などでも、こんな感じでした。

野村 学生さんにとっては、ノムラというのは非常に身近な店と感じてもらってたと思います。先生方も、学校も含めてね。「彦根高商の生徒さんへ」と印刷された吸い取り紙が残っているんです。生徒らに配ったんですよ。

※13 八幡商業学校 明治19年(1886)、大津に県立の滋賀県商業学校として開校、明治34年(1901)に近江八幡に移転、明治40年に滋賀県立近江八幡商業学校と改称。多数の企業家を輩出。現在の八幡商業高等学校。

※14 吸い取り紙 インクなどで書いたあと、上から押し当ててその水分を吸い取らせる紙。

戦争の時代、満州へ出店

野村 横田健造さんっていうのは番頭さん。

ここここに女中が2人。ここらは全部、



▲満州支店の人々。後列で子供を抱いているのが野村紙文具店の大番頭で満州支店の店長となった川崎光治さん

▲野村紙文具店の従業員出征の記念写真（昭和15年）。中央が出征した横田健造さん、その右が2代目野村善七さん、その隣が当時小学6年生だった善一さん

丁稚さん。帽子かぶってまっしやる。青年学校の生徒です。この人は高等科。これが私、小学校6年生。

▽お坊ちゃんですね。

野村 これは出征祝い用の第一正装ですわ。この人なんかは小学校5年生で、うちに來てるんですよ。6年生の卒業もうちで働きながらでした。この人は高等科1年から。ほて、高等2年まで終わると、今度は青年学校へ入って夜間勉強する。

▽彼らの仕事は何なんですか。

野村 雑用や販売手伝いです。いわゆる丁稚。この辺が中堅で、この人らが一番頭、これらが番頭。兵隊の格好してる人も番頭、兵隊にいつぱい行つとくで、在郷軍人でおったんやな。これが職人さん。紙を貼りに継いだり、ノットついたり。今みたいに機械で作るようなもんやない。紙を断裁して、仕事台の上で折っては木でたたいて二つ折りして、糸綴じしていく、ほとんど手作業。

▽紙の断裁も包丁で切っている時代ですね。**野村** 包丁で切る時もありましたが、私とこはギロチンみたいな断裁機の大きなやつがありました。まだ譲った先に残ってる

※15 青年学校 昭和10年（1935）、実業補習学校・青年訓練所を統合し、全国市町村に設置された学校。小学校卒業の勤労青年に職業教育・普通教育・軍事教育を行った。昭和14年に満12歳から19歳未満の男子は義務制となり、軍事教育が中心となる。

※16 在郷軍人 平時は民間で働いているが、戦時には必要に応じて召集される軍人。

※17 石版 平版印刷の一つ。石版石の表面に脂肪性インクで文字や絵などをかき、水と脂肪の反発性を利用して印刷する。

※18 風船爆弾 第二次大戦中、アメリカ本土を攻撃するために考案された兵器。直径約10mの紙製の気球に焼夷弾をつるして偏西風にのせて飛ばした。

思う。こんな、ごつついもんや。グワツとこう手で回すと、ザツと下りる。職人の定次郎さんの家は芹橋十四丁目の中ほどにあつて、普通の家に断裁機を置いてね。

別に、障子紙に「御障子紙」と印刷する石版屋さんがいまんね。わしらの子供の時は、そういうところへよう遊びに行きまんねや。丁稚の後からついて。丁稚さんいっても小学6年生とかの子供やし、わしもいつしよに大事にしてくれてね。

▽当時の商売はどうだったんですか。

野村 戦争がだんだんと激しくなつてくると、商品がなくなり、工場は全部軍需工場に変わる。民需の商品は皆、生産がストップしちゃった。障子紙にしてもそう。紙屋さんがその時分、何を渡いてはったかいうたら、風船爆弾を作るための紙を渡いてはるわけ。統制経済の中では、仕入れる商品もない。

▽それで、昭和18年（1943）には満州支店を出店となるんですか。

野村 たまたま私の父と小杉合名会社（現、コスギ）という大きな繊維会社の小杉富三郎さんという人と、八幡商業学校で同級生やつたんです。当時の八幡は、近江商人の御曹司連中がいた時代で、「布団の西川」の西川甚五郎さんとも同級生。父が同窓会で小杉さんに会つたら、「満州は非常に景気がいいよ」といわれたんです。満鉄は貫通するし、治安もよし。そんなことで、満州にある牡丹江省東寧の小杉合名の店を譲っていただいた。

昭和5年初荷の写真で、赤ん坊の僕を抱いてくれる人が、川崎光治さんといって、中堅番頭やつた。この時分にね。昭和18年に満州に店を出す時に、川崎さんが店長で、嫁も子供も連れて行つてもらったんです。▽満州支店の人たちの集合写真があります。

野村 写真に写ってるのは川崎光治さん、その奥さんと子供3人。他に男性が3人。戦争中、男は日本におったら兵隊に行くか、徴用で工場へやられるかだった。兵隊に行くのはしょうがないけど、徴用に行くのは勘弁してほしいから、「徴用逃れ」を誰もが考えた。満州支店というのはそういう性格も持ってたわけです。

この写真が撮られた後、さっきの出征写

ざりざりで建物疎開による解体をまぬがれる

▽そんな中、野村さんは昭和20年4月に進学されるわけですが。

野村 本来なら彦根高商に入学するはずが、教育戦時特別措置というので、昭和19年2月に彦根高商は彦根経済専門学校に改称、さらに彦根工業専門学校に変わってしまった。私は、その2期生です。それも、入学したらずぐに大津の東洋レーヨンへ学徒動員で行かされた。向こうで午前中勉強して、午後から工場で仕事。7月には東レに爆弾が落ちてね。

▽いわゆる「パンブキン」、模擬原爆^{※19}というやつですね。東レに落ちたのは7月24日。

野村 東洋レーヨンへの引き込み線のプラットホームの上へ落ちたもんだから、爆風が走って、ものすごい死者が出た。僕らは午後の工場現場やって、午前中は授業やってん。いきなり空襲警報やていうて、先生は授業をストップや。ほの時分、まだ爆撃おうてへんで、怖くないねん。ほんなら、B29の音がした。グワツ。ものすごい音がして、ダーンと来はってね。皆、ウワアツと、山へ向かって一目散。後で教室へ戻ってみたら、出たところの廊下に、こんな爆弾の鉄の塊が天井をぶち抜いてどおんと居座った。

もうそれからは、みんな戦々恐々や。警

真の横田健造さんが戦地から帰ってきた。いとると、また、戦争に行かんらんかもしれん。ほんで、うちの親父が後から満州店へやりました。

満州店は非常に繁昌しました。やがてソ連と満州の国境警備隊、いわゆる陸軍の商舗^{まき}といって、薪などの物資を納入する店になっていきます。米も売る、衣料品も売る、日東洋行という名前です。

戒警報いうだけで、山の奥まで逃げて、仕事なんてする気もない。今度は、空母からの艦載機がどんどん来まんねや。ちっちゃなグラマンというやつ。逃げた山から見ると、琵琶湖の湖面をザーツとすれすれで向こうの東洋レーヨンの方へ行きよんねや。

▽一方、彦根では空襲の被害をおさえるために建物疎開^{※20}が始まるわけですね。

野村 銀座の店の周りは、7月から建物が潰されていった。滋賀銀行の周り100m

かそれぐらいを空き地にしたのが、第1次建物疎開。続いて第2次建物疎開で、マルビシ百貨店の建物から滋賀銀行の間を空き地にするというので、うちの店も引掛かった。7月末に発表があつて、8月20日までに潰せというわけ。親父が、東洋レーヨンの寮へ、「男手がいるんで、休暇をやってくれ」と連絡して、私は帰ってきた。商品を全部倉庫に移して、家財道具は多賀町中川原の親戚にあつた土蔵を一つ借りて、私がリヤカーで運んだ。

さあ、今晚でこの店ともお別れやという日に終戦。8月15日は、座敷の畳を上げ、畳板も上げ、床の間に置いたラジオで終戦の詔勅^{しやうちよく}を聞いた。雑音で十分聞き取れぬものでしたが。

▽ざりざりですね。

※19

模擬原爆 長崎に落とされた原爆と同じ形状と重量で、ブルトニウムの代わりにTNT火薬をつめた大型爆弾。通称「パンブキン」。原爆投下の訓練として、1945年7月20日から8月14日まで日本各地に計50発が投下された。7月24日の東洋レーヨン滋賀工場への投下による死者は16人、負傷者104人。

※20

建物疎開 空襲・火災などによる損害を少なくするため、都市内部に空き地を設定するもの。彦根市では、昭和20年7月9日から31日まで、第1次として彦根警察署・滋賀銀行彦根支店などの周辺142軒が解体され、7月31日に第2次として京橋筋から市役所周辺にかけて約500軒の家屋解体が設定された。

野村 うちは残つたが、東2軒隣の日の出屋さんまでは潰された。木造やから速いねん。棟のところへロープ掛けて、みんな「わいわい、わいわい」言うて、揺すって、ほんでしまひなん。帝国館という映画館を壊しよる時に見てたけど、あんな大きな建物やと、倒れたところにブワツと土ぼり

がな、もうすごい。その印象がある。

▽その頃、満州店はどうなつたんですか。

野村 日本の敗色が濃くなると、ソ連が日ソ不可侵条約を反故^{はご}にして、満州を占領しちゃつた。店主の川崎さんにはすぐその場で現地召集がかかつて、みんな、ちりぢりばらばらになつて。ハルピンかどこの鉄道駅の陸橋で奇跡的に再会できたんだけど、食べ物もなく、結果的には奥さんと子供2人が亡くなり、光治さんは長女の手を持ち、遺骨を下げて帰ってこられた。

横田さんの方は抑留^{おぼりゅう}されそうになつたんやけど、夜に列車が徐行してるすきに屋根のない無蓋車^{むがいしゃ}から飛び降りて、親切な現地の人に助けてもうて帰ってこられた。

これはうちの店の一番悲しい歴史です。

(2011年7月22日・8月11日、聞き取り)

戦後の混乱期、高度成長期に関する聞き取りも含めて、近日弊社より単行本化の予定です。

コウモリのおっぱい

多賀町立博物館学芸員
阿部勇治



夏の夕暮れ時、たそがれの街でふと顔を上げると忙しく飛び回る黒い影が目に見えだした。コウモリたちが、エサの昆虫を追いかけているのだ。気に留めなければツバメが飛んでいるのと大して違っただけに見えるが、彼らはれっきとした哺乳類である。翼にはちゃんと5本の指の骨が備わっており、頭には立派な耳介もある。そして、「赤ちゃんを産んで母乳で育てる」という哺乳類ならではの習性が、彼らにも受け継がれている。

6月～8月にかけて、コウモリたちは出産と子育ての季節を迎える。彼らの多くは洞窟や木の洞をねぐらにしており、毎年この時期になるとメスたちは決まった場所へ集まってきて子どもを産む。生まれたばかりの子どもは毛のない丸裸の状態、目も見えず飛ぶこともできない（キクガシラコウモリの仲間、成長が進み毛の生えた子どもを産む）。子どもの数は種によって異なるが、大半は1回の出産で1頭、多くても2頭が普通だ。ネズミなど他の小型哺乳類では10頭近く産む者も少なくないので、この数はとりわけ少ないように感じられるだろう。でも、妊娠中もエサを求めて飛び回らなければならないという宿命を背負っていることを考えると、むやみに子どもの数を増やせない事情に納得がゆく。「子どもの数に合わせる」という理由なのだろうか。コウモリの多くは左右の脇腹に1つずつ合計2つの「おっぱい」

を持っている。授乳中のコウモリのおっぱいは、その迫力はともかくとして乳頭の周りの毛が抜け立派に自己主張している。コウモリの母乳は、人間のそれと比べ乳糖が少なく脂肪や蛋白質が多い。生まれた子どもはわずか40日ほどで自立するが、栄養価の高い母乳が短期間で著しい成長を支えているのだろう。

子育て中でも、母親は夜になるとエサを食べに子どものもとから離れてねぐらの外へ飛び立ってゆく。残される子どもたちは数百～数千頭にもなるが、母親はわが子の声をちゃんと聞き分けてそこへ帰ってくるというのだから驚くばかりだ。さらに、コウモリの母子は、時に信じられないような行動を見せることがある。モモジロコウモリの集団を調査中、体に巨大なイボのようなものを付けている個体が目にとまった。目を凝らしてよく見ると、乳首に吸いついた子どもをぶら下げて母親が飛び回っていたのだ。子どもの体重は母親の半分近くもあり、飛翔による空気抵抗を含めると小さな乳首にはものすごい力が加わっていることになる。ぶら下がっている子どもの吸いつく力も相当なものだ。

コウモリの知覚している世界も身体的な能力も人間とはまったく異なるのだし、こうした行動は本能に従っているだけと割り切って考えることもできる。しかし、コウモリの母と子の間には、人間の親子にも負けない強い絆があるように思えてならない。夏の夕暮れ時、もしコウモリを見かけることがあったら、子どもを育てながら一生懸命に生きているお母さんコウモリのことをぜひ思い出してほしい。

◀モモジロコウモリの乳頭



●阿部勇治さんの案内で、佐目のこうもり穴（多賀町）に入る観察会が11月6日に行われます（10ページ参照）。

三館連携特別展 神仏います近江

滋賀県内3会場で、宗教美術約300件を展示、近江の歴史の根幹をなす宗教文化に3つの視点で迫る過去最大規模の展覧会。



「休館日」月曜日（9月19日、10月10日は開館、9月20日、10月11日は休館）「入館料」大人1000円、高大生800円、小中生300円
「お問い合わせ先」TEL 074-8(82)3411
瀬田会場 滋賀県立近代美術館

「祈りの国、近江の仏像 ― 古代から中世へ ―」

9月17日(土)～11月20日(日)

平安から室町にわたる仏像の数々を展示し、仏教造形の多様で魅力的な姿に迫ります。

「休館日」月曜日（9月19日、10月10日は開館、9月20日、10月11日は休館）「入館料」大人

950円、高大生650円、小中生450円

「お問い合わせ先」TEL 077(543)2111

大津会場 大津市歴史博物館

「日吉の神と祭」

10月8日(土)～11月23日(水・祝)

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

比叡山延暦寺の守護神、日吉大社の歴史を神像や山王曼荼羅、山王祭祀図などで紹介。

主催：びわ湖の森の生きもの研究会

協力：コンパスケーピングユニット、多賀ケーピングクラブ

「佐目のこうもり穴」観察会

11月6日(日)

午後1時30分～4時30分

鈴鹿山脈北部は近江カルストと呼ばれ石灰洞が多数存在します。縄文時代の遺跡でもある「佐目のこうもり穴」で、石灰洞内の環境と特異な洞穴性生物を観察しませんか。



案内者 阿部勇治氏（びわ湖の森の生きもの研究会）

集合場所 多賀町立博物館 駐車場（午後1時30分厳守）

- 内容
- ①石灰岩の転石から化石（フズリナ、サンゴ類、腕足類など）を探す。
 - ②犬上川の河原で岩石を観察する。
 - ③佐目のこうもり穴の洞内に入り、生物と洞内を観察する。

持ち物 懐中電灯、長靴、軍手、ゴミ袋

定員 15名（先着順。小学生以下は保護者同伴）

参加費 500円（小学生以下は無料）

その他 前日以降にまとまった雨が降り、犬上川が増水した場合は中止となります。

お申込み方法 お電話もしくはファックスで、参加希望者のお名前とご電話番号を下記へ。

びわ湖の森の生き物研究会事務局（サンライズ出版内）担当：岸田

TEL 0749(22)0627 FAX 0749(23)7720

3館連携特別展「神仏います近江」
3館へ入館可能なお招待券 プレゼント

応募方法 お名前、ご住所、ご連絡先（電話番号もしくはEメールアドレス）と、本誌に対するご意見・ご感想をご記入のうえ、下記まで、ファックスまたはEメールでお申し込みください。

- ・応募者数が10組20名様になり次第、終了させていただきます。
- ・当選発表は、招待券の発送をもって替えさせていただきます。

サンライズ出版「Duet」編集部

「神仏います近江プレゼント」係

FAX 0749(23)7720 e-mail: info@sunrise-pub.co.jp

2枚1組
×10組



「休館日」月曜日（10月10日は開館、10月11日、11月4日は休館）「入館料」大人1000円、高大生500円、小中生無料
「お問い合わせ先」TEL 077(521)2100
学術シンポジウム
「最澄の時代、近江の仏像」
10月30日(日) 午後1時30分～4時30分
「会場」大津市民会館（小ホール）
「パネリスト」伊東史朗氏（文化庁文化財部主任調査官、長坂一郎氏（東北芸術工科大学教授、佐々木進氏（栗東歴史民俗博物館館長）、井上一稔氏（同志社大学教授）
「参加費」無料「定員」200名（申込先着）
「申込方法」官製ハガキに「10/30シンポジウム・郵便番号・住所・氏名・電話番号」を記入のうえ、左記まで。
〒529-1814 甲賀市信楽町田代桃谷300 M I H O M U S E U M 実行委員会事務局
「シンポジウム」係



三田村今昔見聞録 —長浜市三田町の史跡と暮らし— 三田村法勝 (北川勝弘) 著

A 5判並製本 総97頁 非売品

お問い合わせ先 長浜市三田町1189 (著者)

姉川古戦場のある長浜市三田町は、合戦にまつわる伝承の他、国指定史跡「三田村氏館跡」や水利関係の古文書類を残す歴史の宝庫。信仰と暮らしの姿を紹介。オールカラー。(2011. 3刊)



ゆく雲遠く

澤田壽栄雄 著

四六判並製本 総138頁 非売品

お問い合わせ先 サンライズ出版 TEL0749 (22) 0627

高度経済成長時代、中日新聞社の記者として活躍した著者の署名記事を収録。中部圏の経済状況の変遷や地域開発のようすなど、記者の目で鋭い中にユーモアを交え時代に迎合せず真摯な筆致で綴る。(2011. 5.25刊)



西野水道と農民

成田迪夫 著

B 6判並製本 総160頁 頒価1000円

お問い合わせ先 長浜市高月町西野1754 (著者)

江戸時代に人力で掘り抜かれた放水路「西野水道」(県指定文化財)を中心に、当時の農民らの苦難の歴史を紹介。『浅井三代記』をもとに、戦国時代に浅井氏に仕えた西野の郷士などについても解説する。(2011. 4.10刊)



近江坂田郡の条理と地理

山川恵弘 著

A 4判並製本 総242頁 非売品

お問い合わせ先 米原市三吉76 (著者)

約40年前に取り掛かったもののそのままになっていた旧坂田郡の条里地割の復原を平成16年頃から再度調査、研究。地域の多くの文献と実地調査をもとにまとめた労作。旧坂田郡、旧長浜市の条里付図2枚付き。(2011. 6.14刊)



句集 山笑ふ

梶香 著

四六判上製本 総159頁 非売品

お問い合わせ先 大津市青山1丁目6-10

大林元太郎 (発行者)

湖を遠巻きにして山笑ふ／遺骨なき墓を洗いで五十年——母が詠んだ俳句とともに、夫と別れ別れのまま満州から引き揚げ、女手一つで二人の子を育てた回想記を収録。(2011. 4.17刊)



忘れぬうちに伝えたい

湖北町の伝統食・地産食 [増補版]

湖北町食事文化研究会 編集・発行

B 5変判並製本 総152頁 頒価1500円

お問い合わせ先 長浜市湖北町伊部585 (著者)

4年前に発行され品切れ状態だったレシピ集が、再版の声に応え、増補版として刊行。初版読者から要望のあった料理など25品を追加、計105品の料理レシピを掲載。(2011. 7. 1刊)



ふるさとの歴史を探索

—川守の今昔—

蔵口嘉寿男 著

A 5判並製本 総106頁 非売品

お問い合わせ先 蒲生郡竜王町川守573 (著者)

三角縁神獸鏡が残されていた雪野山古墳、童子形塑像などが出土した雪野寺、近世弓術の祖・吉田重賢を輩出した川守城…この地に生まれ育った著者が故郷の歴史を綴る。(2011. 4.20刊)



いにしえ紀行自選集

歴史旅悠々

幸山正人 写真・文

A 5横判並製本 総122頁 非売品

お問い合わせ先

奈良市西登美ヶ丘5-15-11 (著者)

著者の地元・奈良をはじめ、日本各地の歴史ロマンの地を巡った紀行文57編と写真57枚。(社)大阪貿易協会発行『貿易人』に14年間連載された「カメラの歴史紀行」から自選、加筆修正。(2011. 7. 1刊)

12歳から学ぶ滋賀県の歴史

〔改訂版〕

滋賀県中学校教育研究会社会科部会 編

B 5判並製本 総202頁 定価1260円

書店にて発売中

日本史を語る上で避けることのできない地、近江。滋賀県内の先生が贈るどこからでも読める社会科副読本。累計1万8000部突破のロングセラーが各種情報を一新して登場。

宿場町つちやま

—土山宿を歴史する—

高橋慶一 著

A 5判並製本 総156頁 定価1575円

書店にて発売中

鈴鹿峠を越え、近江国最初の宿場・土山宿。街なみ整備と街道ガイドに尽力してきた著者が、宿場の歴史やエピソードを紹介。江戸時代にタイムスリップしたような町並み散策に必携の一冊。

近江のかくれ里

—白洲正子の世界を旅する—

いかいゆり子 著

A 5判並製本 総192頁 定価1680円

書店にて発売中

白洲正子の紀行文『かくれ里』『近江山河抄』の舞台を訪ね、その魅力に迫る「湖国と文化」連載の単行本化。探訪に便利な地図や交通案内などを付した決定版。カラー口絵付き。



滋賀県で大切にすべき野生生物

—滋賀県レッドデータブック2010年版—

滋賀県生きもの総合調査委員会 編

A 4判並製本 総584頁 定価3360円

書店にて発売中

5年ぶりの最新版。カテゴリ別に1288種の生態と減少要因などを解説し、口絵カラー写真約470種掲載。新たにコケ植物、地衣類、その他陸生無脊椎動物を追加。

山門水源の森

—里山の再生と保全の10年—

山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会 編

A 5判並製本 総234頁 定価1995円

書店にて発売中

林地化した湿原を復元し、観察コースの整備などが行われた里山に、今では年間5000人もが訪れる。10年の活動をふり振り返り、各地で応用できる湿原保全の技法を紹介。

小舟木エコ村ものがたり

—つながる暮らし、はぐくむ未来—

NPO 法人エコ村ネットワークキング 編

A 5判並製本 総146頁 定価2100円

書店にて発売中

近江八幡市の「小舟木エコ村」で始まった新たな試みは、人と人、人と社会、人と自然の共生型コミュニティづくりである。実際の暮らしぶりをカラーで紹介。



表紙写真

野村商店（後のノムラ文具店）の

昭和5年正月初荷

提供：野村善一さん

中央の赤ん坊が当時1歳だった野村善一さん。その右が、戦時中、満洲支店に赴任することになる川崎光治さん。その右、着物の男性が善一さんの父・2代目野村善七さん。背後にあるのが、荷を満載した大八車。

手旗に書かれた「命」は、明治の創業期から用いていたマークで、昭和43年（1968）に卸商として善一さんが設立したヤマノ商事株式会社の社名の由来となった。

Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

お申し込み先

〒522-0004

滋賀県彦根市鳥居本町655-1

サンライズ出版株式会社

Duet編集部

TEL (0749) 22-0627

FAX (0749) 23-7720

（振替）01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。

<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

ノムラ文具店さんには、妻の方が私より思い入れがある。ドールハウスの壁を漆喰風に仕上げる「セラミックスタッコ」という画材を取り寄せてもらったというのだが、今はネットで購入できるので、すべて10年以上前の思い出話。申し訳ない。野村善一さんからの聞き取りは、初回が4時間50分、2回目4時間。ひととおりうかがえたので、話の前後や構成を整えて、追加の聞き取りなどを行い、淡々と文庫の一冊となる予定。乞うご期待。㊦